

編集 後記

本号では、原著2編、公衆衛生活動報告1編、資料1編を掲載しております。そのうち2編は、検査値などの客観的指標ではなく地域住民が抱える自覚症状に焦点をあてた研究です。

1編目は、農村部における地域在住高齢者は筋骨格系の痛みに対し「病院での治療」、「日常での積極的対応」、「日常行動の制限」、「自己療法」、「安静休息」の5つのタイプの方法で対処しており、痛みの重複や痛みの継続が「病院での治療」や「日常行動の制限」に関連していることを明らかにしております。今後、対処方法の効果や地域性を考慮した検証を期待いたします。

2編目は、地方紙の自己申告型死亡記事「おくやみ」欄を用いて人口動態統計等の既存の死亡統計を補完しようとする試みであり、死因の妥当性は低いものの、一定の捕捉率を示していることを明らかにしています。1つの地方紙しかない県においては死亡記事で比較的高い割合で死亡が把握できるという興味深い知見を示しております。

3編目は、先天性風しん症候群の防止対策として風しんの流行中、流行後の抗体検査と予防接種、そして、様々な機会をとらえた予防接種事業の周知活動についての報告です。風しんの低抗体価者の割合は、男女ともに約3割であり、先天性風しん症候群の予防には地域全体で風しん抗体の保有率を上げる必要性があり、成人への対策のみならず定期接種も含めた総合的な対策の重要性を示しています。2020年までに風しん排除するという「風しんに関する特定感染症予防指針」の目標達成にむけた活動において参考にできる知見と思えます。

4編目は平成22年度国民生活基礎調査のデータを基に高血圧通院患者が自覚症状として、頭痛、動悸、肩こり、足の浮腫とだるさを抱えていることを明らかにし、加齢や併存疾患など複合的要因にも留意して長期的かつ包括的な高血圧治療管理を行っていく必要性を示しています。

多様な観点から人々の健康と人々を取り巻く環境について探究し、公衆衛生活動の発展につながる知見を広く共有するためにも、できるだけ多くの会員の皆様に活動や研究成果を論文として本誌にご投稿いただきますようお願い申し上げます。
(和泉比佐子)

次号予告 (第65巻・第3号)

原著

現健康推進員、既健康推進員、非健康推進員のヘルスリテラシー、ソーシャルキャピタルおよび健康行動の特徴……………林 千景, 他
救急搬送症例における覚知時刻・場所および救急隊判断程度と搬送先病院の選定困難性の関連

……………熊谷美香, 他
都市高齢者における社会的孤立の予測要因：前向きコホート研究……………江尻愛美, 他

公衆衛生活動報告

外海小離島での看取り体制構築の試み「看取りに関する事務マニュアル」の作成およびこれを用いた支援の展開……………堀之内広子, 他